

Karumai

広報 かるまい特別号

町の魅力と町民の輝く姿を届ける情報誌



軽米町キャラクター
ヒエポン

町村合併70周年のごあいさつ

軽米町長 山本 賢一



軽米町は昭和30年1月1日の旧軽米町、小軽米村、晴山村の1町2カ村の合併から70年の節目を迎えるました。

この長い歴史の中で、豪雨災害など幾多の困難に直面しながらも町民の皆様の郷土愛とたゆまぬ努力、そして多くの支援により、町勢は着実に発展してまいりました。長年にわたり町勢発展のためにご尽力くださいました諸先輩方、町民の皆様に心から敬意と感謝の意を表するものであります。

町村合併から30周年を迎えた昭和60年には、十勝開発の先駆者として功を収めた本町出身の大川宇八郎翁が縁で、北海道音更町との姉妹締結を行い、本年で40周年を迎えました。姉妹締結40周年の記念事業として、両町の歴史や文化を紹介する相互資料展、各団体による交流事業、さらには音更町訪問交流ツアーナどの記念事業を実施いたしました。参加した町民の方々は、広大な大地に広がる美しい景色と音更町の皆様の温かいおもてなしに感動した様子で、改めて友好の絆を実感できる貴重な機会となりました。

さて、現在、町を取り巻く状況は急速に進む人口減少や少子高齢化、物価高騰による経済情勢の不安定化、激甚化頻発化する自然災害など日々大きく変化しております。本町では多様化する地域課題を解決し、住みよい環境と活力ある地域社会を維持していくため「軽米町総合発展計画」及び「第2期軽米町人口ビジョン・総合戦略」に基づき各種施策を推進しております。

「かるまい文化交流センター宇漢米館」は令和5年12月の開館以来、町内外から多くの皆様にご利用いただいております。この施設が町の新たなコミュニティの拠点となり、地域活性化の一翼を担つていくことを期待しているところです。

当町はこれまで「子育て支援日本一のまち」を目指し、高校生以下の医療費や保育料、児童生徒の学校給食費の無償化などに先進的に取り組んでまいりました。さらに、脱炭素社会の実現に向け、太陽光や風力、バイオマスなどの再生可能エネルギーの導入によるまちづくりにも力を入れています。

町村合併70周年を契機とし、歴史と伝統のある軽米町のさらなる発展のため、町の将来像である「一人一人の活力と思いやりが循環するまち」の創造に向け、町民の皆様と手を携えながら、まちづくりに取り組んでまいります。結びになりますが、町民の皆様のご健勝とご多幸を心よりお祈り申し上げ、ごあいさつとさせていただきます。

軽米町 町村合併 70周年記念 まちづくり座談会



ごあいさつ

軽米町町村合併70周年を祝して

軽米町議会議長 松浦 満雄

軽米町議会を代表いたしまして、ごあいさつを申し上げます。

昭和30年1月1日に旧軽米町、晴山村、小軽米村の三町村が大同団結し本年で70周年の節目の年を迎えることができました。これもひとえに先人の長年にわたる努力の積み重ねの結果であり、これまで町の礎を築いて来られた方々に対し深甚なる敬意を表するものであります。

また、同時に音更町との姉妹町締結40周年も迎えることが出来ました。長きにわたり交流、親睦を深めてまいりました音更町様に対しまして深い敬意と感謝を申し上げます。

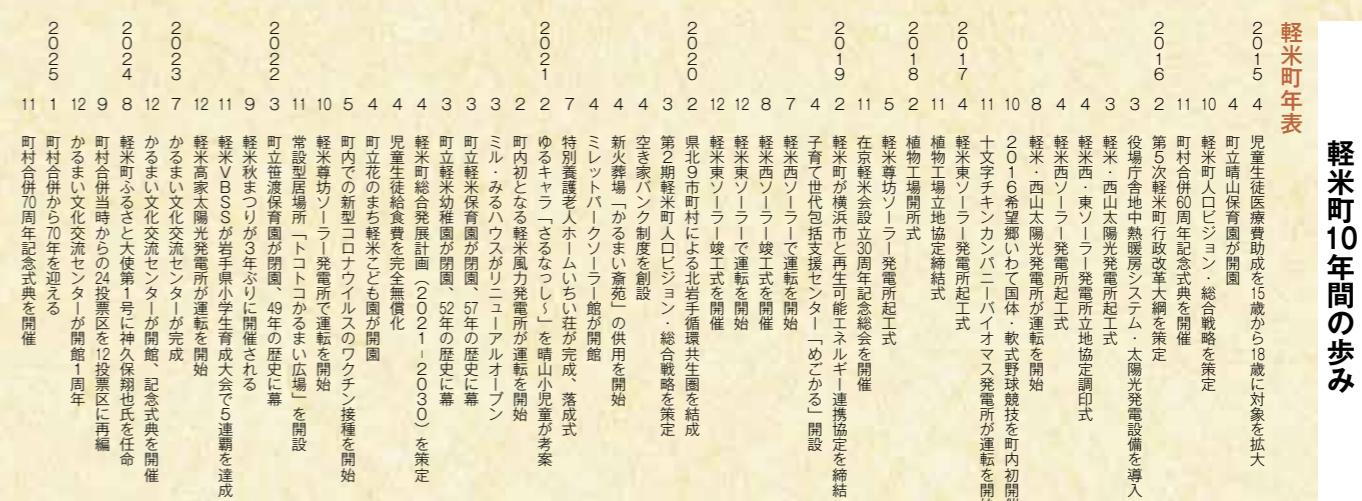
これまで軽米町は輝かしい発展と歴史を刻んでまいりました。しかし近年では、急速に進む人口減少、少子化、高齢化がまちづくりに大きな影を落としています。

明治と昭和の二度の合併を乗り越え、そして平成の大合併の嵐の中で、自主、自立を選択し、厳しい財政運営を強いられて20年経過致しました。合併を選択した町村の中では自主権を失ったことに対し、大きな失望を抱いている住民の声も聞こえできます。結果については後世の評価を待ちたいと思いますが、町民の皆さま方はどのように感じておられるでしょうか。

町議会といたしましても、この70周年を契機にさらなる飛躍を目指して、町民とともに英知を結集し、持続可能なまちづくりに誠心誠意取り組んでまいり所存であります。

結びに、町民の皆様方のご多幸ご健勝をお祈り申し上げ、ごあいさつとさせていただき

この10年間(2015-2025)の歩み



11月21日の町村合併70周年記念式典での「まちづくりシンポジウム」を前に、パネリストである6名が座談会を行いました。それぞれの視点から見える軽米町の今と未来を語ります。



農業は、効率化も大事だけど、みんなが楽しく、そして長く続けられる環境づくりも必要だと感じたと話す苅谷さん

率いやすい事務作業を改善し事業を軌道に乗せること、そして小規模農家の魅力を発信して苅谷果樹園ブランドを確立し、町の魅力になることを目標にしています。

神久保・僕は農業の効率化に興味があるのですが、昔からの知恵や教えと効率化を同時に進めることは難しいのでしょうか？

苅谷・軽米町は平らな土地が少なく、機械化が難しいと、いう点があります。特にリンゴは手作業が多く、手伝つてくださる方がいないと手が回りません。果樹園を手伝つてくださる皆さんは70代や80代の方が多いので、短時間でたくさんの方の作業を終わらせるよりも、みんなで安全に楽しく仕事ができる環境の方が重要です。あ

畠澤・私は、ふるさとである軽米町とのつながりを深めて地域の人々と連携し、共助の精神を育みながら、より良いふるさとの未来とともに創造するという思いで、今後も応援していきたいと思っています。また、今はさまざまな地域で過疎化が問題になっています。軽米高校の存続も重視したい点で、人口減少が進むなか、町外からも生徒を受け入れる必要があります。葛巻高校では

後もグループ活動を続けるとともに、軽米町の活性化に貢献していきたいと思っています。

夏井・大学卒業後は関東の建設会社に就職しましたが、家業を継ぐためにUターンしました。現在は実家の建築会社で働きながら、商工会青年部の部長を務めています。仕事は軽米町を中心に、戸建て住宅の新築やリフォームなど、住宅に関する施工を全般的に行っています。

安達・昨年5月に地域おこし協力隊として着任し、町の魅力発信プロジェクトを担当しています。情報サイトの立ち上げや、SNSを利用した情報発信、イベントのポスターやチラシのデザインなどを行っているほか、今年から個人事業主として開業し、商工会の活動にも参加しています。

長く続けられる環境を整えたい

姓名・農業に携わるよいかがんでも最初の頃は効率化できる所ばかりいました。ただ、続けるうちに効率を求めるだけでは持続的な農業にはつながらないのではないかと思うようになり、今は先輩方の知恵と教えを大切にしながら地域に根ざした農業を育てていきたいと考えています。また、女性をはじめ果樹園を手伝つてくださる皆さんに安心して働ける環境を整えることや、効率化しやすい事務作業を改善し事業を軌道に乗せること、そして小規模農家の魅力を発信して苅谷果樹園ブランドを確立し、町の魅力になることを目標にしています。

まり一生懸命になりすぎず、長く続けられる環境を整える方が、農業は持続できるのではないかと思っています。

軽米高校の魅力を発信



苅谷：苅谷果樹園の代表を務めてい
る苅谷です。果樹園を継ぐまで農業
の知識がなかつたので、栽培だけで
なく経営や販賣方法なども試行錯誤
しながら学んでいます。現在は、岩手
大学が認定する「アグリ管理士」、自
認定農業者、町農業委員として、自
己実現や地域の農業発展に貢献でき
るよう活動しています。また、会社
員時代の経験を活かして事務作業の
効率化も目指しています。

畠澤・私は、高校卒業後に上京し今
も東京で暮らしています。30代の頃か
ら軽米高校同窓会東京支部と在京軽
米会に入り、現在は同窓会の支部長と
在京軽米会の副会長を務めています。
会員との交流会を開いたり、SNS
で軽米町の情報発信を行ったりするほ
か、個人的にYouTubeで「軽
米高校同窓会東京支部&在京軽米会」
というチャンネルを開設し、活動内容や
軽米町の観光スポット、お祭りの様子
などをアップしています。軽米高校同
窓会東京支部や在京軽米会の会員から
の意見もお伝えしたいと思います。

毎日のあいさつを褒められるようになつたときなどにやりがいを感じて



地域の方々が自分を応援してくれていることが嬉しい。町の人たちの温かさをもっと伝えられれば、町の新しい魅力につながり活発な交流につながるのではと話す神久保さん

以前から「くずまき山村留学」に取り組んでいますし、九戸村の伊保内高校も同様の取り組みを始めて、今は東京からの生徒も受け入れていて、そうです。軽米町は人気漫画で訪れる方も多いと聞きますし、上手く活用して入学者の増加につなげられたらと思います。

町外からの感覚をヒントに

神久保・僕は、気軽に宿泊できる場所があればいいなと思っています。

今も宿泊場所はありますが、インターネット予約や、オンライン決済ができるなど、県外から訪れる人たちにとってもっと利用しやすくなればと感じます。軽米町でのイベントには僕のファンも来てくださいますが、盛岡や八戸に泊まることが多いです。また、夜行バスで来たときにシャワーを浴びれるところがあればとの声も聞きます。こうした設備には維持費もかかるため難しい面もありますが、例えばですけれども、宿泊だけでなく軽米町の炭を使つたバーベキューやサウナが楽しめる施設を作つて、一年を通して県内外から人が訪れるような仕掛けもいかがでしょう。そうすれば気軽に来られるようになりますし、先ほど畠澤さんがおっしゃっていた関係人口を増やすことにもつながるのではないか

りましたし、移住先の環境がわからないと不安は大きいと思います。

安達・僕が実際に軽米町で暮らして実感したのが、思つていて以上に人の繋がりが大切なと感じたことです。宿泊場所や空き物件などのように、人との関わりから得られる情報がとても多いからです。僕の仕事は町の魅力を発信することなので、なおさら強く感じています。でも例えば物件探しについては「見知らぬ人に家を貸すのは怖い」という気持ちが事情としてあることがわからりました。私が元いた地域ではそれを、信用できる管理不動産屋に任せることでクリアしていたのだと思ひます。このように、不安を解消する手段を得るには、さまざまな仕事や立場の人と連携を取ることが大切なのだということを実感しました。これには、いまの自分が持つているネットワーク以上の関わりが必要であり、情報の取得や発信もとても重要です。そのためにも地域全体のネットワークづくりに力を入れて、役立つ情報を広く発信していきたいと思っています。

神久保・町内で暮らす人と、町外から来る人の感覚の違いを理解することは大切ですね。例えばイベントに来てくれるたちは、開始時間に



町外に出たとしても帰りたいと思える、そして帰る場所をつくることが大事だと思う。チャレンジできる環境づくりを考えていきたいと話す夏井さん

帰りたいと思える場所づくり

安達・近隣市の知人から「軽米は、軽米の中だけで完結できている印象がある」と言われたことがあります。もしかしたらこれは、軽米町の立地

合わせて会場に向かいます。地元の人たちは車があるからいいけれど、県外の人は新幹線とバスを乗り継がないといけません。でもそれを想定した開始時間ではないため、行きづらくなってしまいます。例えば八戸から軽米を経由するバスに乗つて来る場合、到着して30分後くらいにイベントが始まるとき余裕をもつて参りできます。先ほどの空き物件も同じで、場所や情報へのスマートなアクセスを意識していくだけで、もつと変わっていくのではないかと思ひます。

四季折々の原風景が魅力を聞かせてください



軽米町への思いを聞かせてください

安達・僕は東京生まれなので、軽米は自然が豊かで素晴らしい町だと思います。四季折々に花が咲くし、秋には稲穂が実り、冬は雪が降つて町が真っ白になる。そして、なんといつても星空がきれいです。交通

夏井・私は関東からUターンして本当に良かったと思っています。だからこそ、「住みたいのに住めない」という現状を知ったときにはショックでした。建設業に関わる人間として、そこは改善していきたいです。また、町の人と話していると「軽米にはコ



軽米町には、四季折々の日本の原風景があり暮らしやすいと感じる一方で、初めて外から来る人にとって不安を感じる場所を作ることです。そして、つか自分専用のヘリポートも作つて、東京と軽米町を自由に行き来できる

夏井・安達さんは、その大変さを経験したんですね。

安達・僕の移住の時も、地域の人方が物件を探すのに協力してくれたと聞いています。

神久保・町の中にいれば得られる情報も、外からだと難しいケースが多いですね。

安達・他の地域おこし協力隊員が移住してくる時も同様のようで、僕も今では「どこか空いてるところ知らぬ?」と聞かれるようになります。私たちには車があるのが当たり前ですが、観光客のことを考えれば周回バスのようなものを運行してほしいと思います。また、建設業に携わっている身としては、空き家問題も気になります。宿泊場所と同じように、

神久保・町の中にいれば得られる情報も、外からだと難しいケースが多いですね。

夏井・私も宿泊場所については同感です。加えて移動手段も考えなければいけないと思っています。例えば「ハイキュー!!」のファンが軽米町に来ても、移動手段がありません。天気が良ければ歩いて回ることもできますが、雨が降つた場合は難しいです。私たちは車があるのが当たり前ですが、観光客のことを考えれば周回バスのようなものを運行してほしいと思います。また、建設業に携わっている身としては、空き家問題も気になります。宿泊場所と同じように、



「ふるさとはずっと心の中にある」をモットーに、人と人のつながりを大切に、軽米町と向き合い、これからも応援していきたいと話す畠澤さん

姉妹町こども視察研修団 OB・OG交流会

姉妹締結の翌年の昭和61年に始まったこども研修団による相互訪問交流事業は、コロナ禍の2020年から2022年を除き、毎年行われています。40年近くの歴史の中で、かつて研修生として参加した音更町のOB・OGが再び軽米町を訪れ、同じく軽米町の研修生だった方々と交流。思い出話に花を咲かせました。



音更町こども視察研修OB・OGの皆さんと交流



今だからこそ大事と思える

大井さんは「当時は軽米の小学生とは、方言が分からなくてうまく話せなかったのを覚えています。今の子供たちよりもなまりがきつかったかも」と振り返ります。それでも、小学校での歓迎会では温かく迎えられ、「その場面はしっかり覚えています」と微笑みます。「今だからこそ、あの時の思い出がすごく大事だったんだと実感しています」と語ります。



旬を迎えたリンゴのもぎ取り体験も楽しみました



軽米高校は生徒と先生、全校が一体となった活動が魅力であり、これからも大切にしたいと、町への思いを話す浅水さん

りんごの収穫を初めて体験

田中さんは小学5年生のとき、軽米町を訪れ、町内の友人宅に泊した経験が印象に残っていると話します。「当時一緒に研修に参加したお友達が、今回の懇親会に来てくれるんです」と笑顔を見せ、26年の時を超えての再会に胸を膨らませています。

した。今回の再訪では、りんごのもぎ取り体験も初めて経験。「かるまいりんご、美味しいですね!はじめて自分の手でもぎ取って、すごく楽しかったです」と、懐かしさと新しさを同時に味わっていました。



田中 義篤さん

軽米町・音更町の 資料館合同展

姉妹締結40周年を記念して、両町の歴史・文化そして現在の町の様子を紹介する合同展が開催されました。両町の歩みをパネルで紹介したほか、音更町の十勝石(黒曜石)の石鎚、エゾシカの赤ちゃんのはく製標本などの貴重なものも展示。音更町(ふるさと交流館)では7月から9月まで、軽米町(歴史民俗資料館と宇漢米館)では10月から11月まで展示されました。



両町の歴史、姉妹締結のきっかけなどをパネル展示で紹介

音更町教育委員会
生涯学習部生涯学習課
生涯学習センター
担当主査
(社会教育主事・学芸員)

横田 寛樹さん

令和5年度に音更ふるさと資料館がリニューアルすることをきっかけに、両町の資料館交流ができるかと考え今回の合同展に繋がったと話す横田さん。「軽米町・音更町ともに長い歴史が積み重なり、今の町の姿になっている。その中で「つながり」と「違い」を知って、お互いの町の魅力を感じていただければ」と合同展の開催をねらいを話します。

両町が「つながる」きっかけとなつた軽米町出身の大川宇八郎翁について分かりやすく紹介し、知りたいと思うような内容に工夫したと言います。「お互いの町の歴史や自然を知ることで、魅力を再認識して、これからも姉妹交流を継続していければ」と今後の交流に期待を寄せます。



令和5年にリニューアルした音更ふるさと資料館



軽米町歴史民俗資料館でも展示しました



神久保・軽米町に戻つてみると、僕が子どもの頃にお世話になつた方がすごく応援してくれるんです。先ほど、軽米町は町の中だけで完結しているという話がありました。地域の力が強いからこそ、こうして応援していただいているのだと感じています。「ハイキュー!!」もそうですが、町全体として応援したくなる空気を生み出しができれば、それが新しい魅力になるのではないかとおもいます。例え、軽米高校の取り組みを町のみんなで応援するように

レがない、「アレがない」という声をよく聞きます。でも「ないから駄目ではなく、それをチャンスだと捉えてチャレンジできる環境があればいい」と思っています。新しいことに挑戦できる、挑戦しやすい町づくりを考えていきたいです。

なれば、それが高校の魅力になって入力希望者が増えるかもしれません。町の人の温かさをいろんな人が感じられるようになると、これまで以上に良い変化が生まれるのではないかと思います。

畠澤・私は東京で暮らして40年以上になります。あるとき、会社の先輩に誘われて行った焼き鳥屋で軽米町産の木炭が使われているのを見て、叱咤激励を受けた気持ちになったことを覚えています。軽米町には本当に良いものがたくさんあって、それは東京で暮らす私たちにとっても誇りです。一方で、止まらない人口流出や高齢化率の上昇、アピール不足、働く場の確保、医療や介護の充実など、解決しなければならない課題も多くあります。軽米高校同窓会東京支部や在京軽米会の会員からは、生涯を通して安心して暮らせる保障や医療介護の充実、墓仕舞い代行、樹木葬の実施などの声が多く聞かれます。

浅水・軽米町は子どもの数が減つて、将来的に軽米高校も合併するのではないかと言っています。でも私は、中高一貫活動や若者会議など、学年を問わずに交流できる場所がなくなつてほしくないと思つています。卒業後も何らかの形で軽米町に関わっていきたいです。ただ、どう

軽米町は子どもの数が減つて、将来的に軽米高校も合併するのではないかと言っています。でも私は、中高一貫活動や若者会議など、学年を問わずに交流できる場所がなくなつてほしくないと思つています。卒業後も何らかの形で軽米町に関わっていきたいです。ただ、どう

軽米町は子どもの数が減つて、将来的に軽米高校も合併するのではないかと言っています。でも私は、中高一貫活動や若者会議など、学年を問わずに交流できる場所がなくなつてほしくないと思つています。卒業後も何らかの形で軽米町に関わっていきたいです。ただ、どう

軽米町は子どもの数が減つて、将来的に軽米高校も合併するのではないかと言っています。でも私は、中高一貫活動や若者会議など、学年を問わずに交流できる場所がなくなつてほしくないと思つています。卒業後も何らかの形で軽米町に関わっていきたいです。ただ、どう

軽米町は子どもの数が減つて、将来的に軽米高校も合併するのではないかと言っています。でも私は、中高一貫活動や若者会議など、学年を問わずに交流できる場所がなくなつてほしくないと思つています。卒業後も何らかの形で軽米町に関わっていきたいです。ただ、どう



同時に、情報発信の強化や宿泊施設の解説など、持続可能な発展のため取り組むべき課題も共有されました。「まちづくりシンポジウム」では、これらのテーマをより深めて意見を交わし、軽米町の未来を考えています。

まとめ

最後に

それでも都会の方がいろんなことを知ることができますし、車がないと不便な点も気になるので、将来的に改善されればいいなと思います。

刈谷・私も情報量の少なさや交通の便は改善されたらいいなと思っています。

それでも都会の方がいろんなことを知ることができますし、車がないと不便な点も気になるので、将来的に改

善されればいいなと思います。

姉妹締結40周年を迎えた2025年、軽米町と音更町は互いの結びつきを確かめるべく、多くの交流事業が実施されました。

軽米町出身の大川宇八郎翁が明治13年（1880年）に現在の音更町に定住するようになってから145年。両町の絆は更に深められています。



みのり～むフェスタ2025の会場で
音更町の小野町長（左）と山本町長



両町のイメージキャラクターがみのり～むに集合（左から、軽米町のひえポン、音更町の和ぎゅりー、モ～るちゃん、おおぞで君）



山内神楽保存会が音更町での初演舞を
披露しました

40周年記念音更訪問ツアー

音更訪問ツアー行程表

10月3日夜	軽米町出発 → ハ戸港～フェリー～
4日朝	苦小牧港着 道内・音更町内見学 音更ふるさと資料館を見学 音更発祥の地碑・大川宇八郎翁顕彰碑を見学 十勝が丘ワイナリー・十勝が丘公園見学 十勝川温泉宿泊
5日	柳月スイートピアガーデン工場見学 みのり～むフェスタ2025（道の駅おとふけ） 音更町内・道内見学
6日朝	ハ戸港到着 → 軽米町到着



音更ふるさと資料館を皮切りに町内を見学



「音更町発祥の地」記念碑も訪れました



中村 幸彦さん
(下河南)

音更町との行く末が続くような仕掛けを

「北海道には何度も行ったけれど、十勝地方は初めてでした」と話す中村さん。今回、友人3名とともに参加した個人ツアーでは、十勝平野の雄大な景色と町の賑わいに強い印象を受けたそうです。「音更は広くて活気がある町。軽米とはまた違った良さがあった」と中村さん。音更町資料館では開拓に尽力した大川宇八郎さん（軽米出身）の資料に触れ、「自分たちのルーツを再確認できた」と語ります。道の駅おと

ふけでは地元にぎわいや観光客の多さにも驚かされたとこと。「軽米とはスケールが違う。けれど、交流があるからこそ、あちらも私たちの訪問を喜んでくれたと思います」と。今後については、「イベントがあるからこそ続していく。何もなければ自然と途絶えてしまう。町民同士の行き来が続いているような仕掛けが大事」と語り、イベントや広報での呼びかけの重要性も指摘されました。

町の活気と広がる風景に感動

「10年ぶりに、ようやく音更をじっくり見られました」。日山美津代さんは10年前、軽米中テニス部やソフトテニス協会の交流で音更を訪れたが、その際は試合中心で、観光はほとんどできなかったといいます。今回は「町の補助があり参加しやすかった」と笑顔に。旅の中で最も印象に残ったのは、早朝に乗った熱気球体験。「上空から十勝の景色を見渡せて、本当にテンションが上がりました」と目を輝かせます。道の駅おとふけで見た山内神楽の演舞にも感動。



日山 美津代さん
(逢台野)

「いつも見慣れている神楽が、場所が違うだけでこんなに新鮮に感じられるとは」と、新たな視点を得た様子でした。音更ふるさと資料館や新しい道の駅や、町の活気や広がる穀倉地帯の風景に感動。「ガイドさんの解説もとても分かりやすくて、大人の修学旅行」のような体験でした」と語ります。今後の姉妹町交流については、「軽米町にも、町民が気軽に楽しめる場所やアクティビティがもっと増えるといいですね」と軽米の魅力向上についても話してくれました。



山内神楽保存会代表
工藤 敬一さん

初の音更公演は挑戦とやりがいに

「やっぱり、自分たちの演舞を“外”で見てもらいたい。その土地の人たちに山内神楽を知ってもらうのが一番の目的でした」。そう語る工藤さんにとって、今回の音更でのステージは大きな挑戦であり、誇りでもありました。発表当日、音更の人々から温かい拍手や声援が送られ、「演者もすごくやりがいを感じていた」といいます。音更町には神楽のような郷土芸能があまりないため、「初めて見る人が多く、迫力や動きの美しさに感動してもらえた」と手ごたえも。「若い世代に受け継いでもらうためにも、こうした“外での発表”の場は本当に大事」と工藤さん。今回が山内神楽として初の音更訪問だったこともあり、「次も声がかかるれば、多少の負担があっても参加したい」と、今後の意欲も語ってくれました。

50周年へ交流続けたい

「次は私たちが行きたいね」と2022年に音更町商工会女性部の皆さんが軽米町を訪れた際、交流の喜びと同時に「もっと深い関係を築きたい」という想いが芽生えました。そして今年、その想いがついに実現。軽米町商工会女性部の11名が、音更町を訪れました。「実は乗り物酔いする人が多くて…」と話す君成田部長。フェリーでの訪問は難しかったものの、飛行機での訪問を決行しました。現



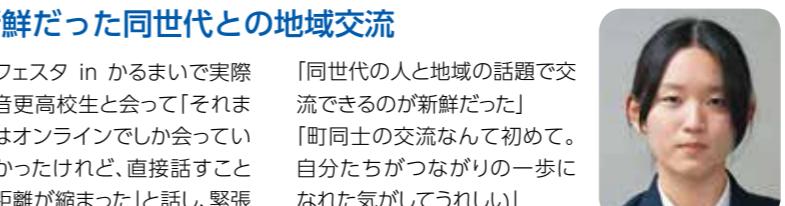
軽米町商工会
女性部部長
君成田 三智枝さん

地では歓迎会が開かれ、音更町長や商工会長も出席する豪華な顔ぶれに。「すごく楽しかった。町の皆さんの温かい対応に感激しました」と笑顔を見せます。次回は軽米町で再会したいとの話題ものぼり、「そのときは、どこを案内しようか、話しながら帰ってきました」と語ります。「10年後の50周年にはどうなってるか分からないけど、また交流できるといいですね」と話しました。

軽米町の印象は音更町より住みやすそう

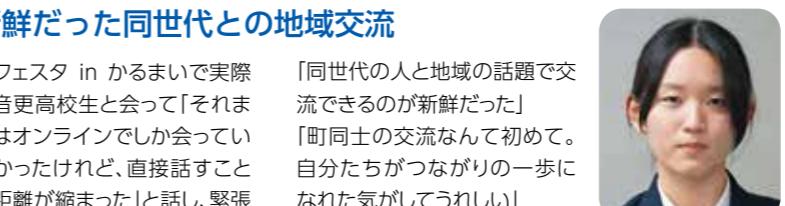
初めての軽米町は、落ち着いた雰囲気でのどかな町並みに「音更町より住みやすそう」との印象を持ったといいます。高校交流では、両町の特産品を使ったマドレーヌづくりに挑戦。雑穀やドライアップルなどを使いながら、お互いに協力して作りました。「型に均等に流し込むのが難しかったけど、みんなで作れて楽しかった」「完成したマドレーヌを友達に配ったら“美味しい!”と言ってもらえて、すごくいい思い出になった」と、笑顔で語ってくれました。この交流を通じて「今後も軽米とつながりたい」「観光にまた来てみたい」「100周年に、また来られたらいいな」という未来を見据えるコメントもありました。

また、「町のキャラクター同士の交流をしてみたい」「他の軽米生とも仲良くなりたい」といった声もあり、今回の出会いが新たな縁へつながっていく期待が感じられました。



音更高校3年
田中 知大さん

「同世代の人と地域の話題で交流できるのが新鮮だった」「町同士の交流なんて初めて。自分たちがつながりの一歩になれた気がしてうれしい」「最初は緊張したけれど、笑顔で話してくれる音更高校の皆さんに元気をもらった」「今度は私たちが音更町に行つて、もっと交流を深めてみたい」など、次の交流への契機となったようでした。



軽米高校2年
中村 心葉さん

40周年記念団体交流事業

軽米町パークゴルフ協会

- 期間：令和7年9月19日～20日
- 参加者：11人
- 交流内容：音更町パークゴルフ協会との交流

山内神楽保存会

- 期間：令和7年10月4日～6日
- 参加者：14人
- 交流内容：みのり～むフェスタでの神楽演舞の披露

軽米町交通指導隊

- 期間：令和7年10月13日～16日
- 参加者：4人
- 交流内容：音更町交通指導隊との意見交換・交流

軽米町商工会女性部

- 期間：令和7年10月24日～26日
- 参加者：11人
- 交流内容：音更町商工会女性部との意見交換・交流会



音更町主催のパークゴルフ交流大会に参加
パークゴルフ発祥の地・幕別町も訪れました

軽米・音更の高校生交流

40周年を記念して、高校生同士の交流機会をつくることを目的に、オンラインでのマドレーヌづくりと、軽米町で開催される食フェスタ in かるまいで対面交流を実施しました。

9月に、生徒が自分の町と高校の紹介をし合うことから始まり、10月には両町の材料を使ったマドレーヌづくりを経て、10月19日の食フェスタに合わせて音更高校の生徒6名が来町しました。最初の緊張感から打ち解け、最後は連絡を交換し合うまでになりました。



オンラインでつないでの高校生マドレーヌづくり



食フェスタで来町した音更高校生と対面交流も

軽米町・音更町姉妹締結40周年記念

Otofuke

おとふけ



音更町キャラクター
おおぞくん



姉妹締結40周年を祝してのごあいさつ

音更町長 小野 信次

軽米町と音更町は、昭和60年10月31日に姉妹締結をして40年という節目の年を迎えました。

両町の深い縁をたどりますと、明治13年に軽米町出身の大川宇八郎翁が遙か海を渡り、未開の地であった本町に入植・定住したことに始まります。現在の音更町は、宇八郎翁をはじめ先人の不屈の精神と不断の努力の上に築き上げられており、誠に感謝の念に堪えません。

また、その縁をたぐり寄せ、結びつけていただいた当時の内澤昭治町長をはじめ、関係者の皆様のご尽力に、心から敬意を表する次第であります。

以来40年に渡り、スポーツや文化活動、小学校児童による相互訪問など幅広い分野での交流が続き、現在に至っております。交流を通して長年の友好関係に想いを馳せるとともに、これから両町の歴史においても、たくさんの友情が育まれ続していくものと確信しております。

これまで築き上げてきた友好関係を大切に、次の世代へと引き継ぎ、姉妹締結40周年という記念すべき年を契機として、両町の絆が一層強まることを切望しております。

結びに当たり、軽米町の更なる発展と皆様のご健勝・ご多幸を心からお祈り申し上げましてお祝いの言葉とさせていただきます。

